

海女文化を世界遺産に

海の博物館 館長 石原義剛

海女文化をユネスコ世界無形文化遺産に登録する活動をはじめて8年目になる。

今年5月に伊勢志摩で開かれたG7サミット取材に集まった世界のプレスの注目を最も多く集めたのが海女だった。日本と韓国にしかない潜水漁をする女性の姿が珍しかったからだろう。

しかし、素潜りで海底からアワビやサザエ、ウニ、ナマコを獲り、海藻類を採っている海女を、国内でもまだ知らない人がいるのに、なぜ海女が世界に誇る文化なのかは、多くの人が関心を示すに至っていない。

人々がほぼ実見することのない海水中で仕事をする海女は潜水の熟練した技術を身に付けているとはいえ、これまで男漁師と同じ生業としか見られず、存在の重要性が顧みられることはなかった。

海女は都会地から遠く離れた半島の先端や離島で働きつづけてきた。それが世間で注目を浴びるようになったのは、テレビドラマ「あまちゃん」に負うところが大きい。ドラマに海女らは遅く底抜けに明るく登場した。

しかし、近年、海女の数が激減し、高齢化しているにかかわらず後継者がいない現状がある。海女は消滅するかもしれない危機に立たされている。5000年の伝統が消えるかもしれないのだ。

そんな中で、改めて海女文化の意味を見つめ直し、ユネスコへ登録する意義を確信するようになっている。

海女文化の誇るべきは、なんと言ってもその歴史と継承されてきた伝統にある。

縄文時代の遺跡から大量のアワビ、サザエ殻とともに、アワビオコシと呼ばれる鹿角製の道具が出土しており、アワビやサザエは潜水しないと獲れない深さに棲息していることから、男女の別は解らないが「あま」がいたことは確かである。

女であることがはっきりする「潜女」という文字がはじめて現れるのは『万葉集』にある山上憶良（660—733?）の「沈痾自哀文」に「女は腰に鑿籠を帯びて深潭の底の潜き採る者をいふ」（武田祐吉校註）であろう。その後は『延喜式』に潜女は記されている。もちろん万葉集には

「いせのあまの朝な夕に潜くといふ

あわびの貝の片思ひにして」（2798）

など「あま」を詠んだ歌は多いが、海女の文字が使われることはなかったし、「あまおとめ」といった用語も潜水する「あま」とは決めかねるが、海女は間違いなくいた。

そして非常に興味深い文章を平安宮廷宮女が綴っている。

「海はなほいとゆゆしと思ふに、まいてあまのかづきしに入るは憂きわざなり。・・略・・男だにせましかば、さてもありぬべきを、女はなほおぼろげの心ならじ。舟にをところは乗りて、歌などうち謡ひて、この柁繩を海に浮けてありく、あやふくうしろめたくはあらぬにやあらん。」

『枕草子』で清少納言は、男は舟の上で鼻歌を歌っている。けしからんと、憤慨している。彼女は幼児期に父親について長門国へ行ったことがあり、女の「あま」の操業の様子を実見したと思われる。

時代は下って、『源平盛衰記』（巻44・1333）に、女の蜃（あま）が登場する。源平合戦が壇ノ浦の闘いで終わった後、安徳天皇とともに海底へ沈んだ「宝剣」を探すため、長門の老松若松という母娘の蜃（海女）が源義経に招かれる話がある。老松は海底に潜って、竜宮城で大蛇に護られた宝剣を見つけるが、返して貰えず、宝剣は戻らなかった。

中世の歌集『夫木和歌抄』（1310）には海人、海、磯、貝などの巻に多く「あま」が詠われている。

海女自身が記録を残すことはなかったが、海女の存在は、右のような多くの文献記録中に、書留められてきた。それほどに「あま（海女）」は好奇の目で見られる存在としてあった。

しかし、海女の歴史の記録探しはまだ端緒についたばかりである。

現代は高度な科学や先端技術を優先する時代であり、ややもすると人間の伝統技術や自然との共生を重んじた生産や暮らしを軽視する社会になりつつある。そんな時代に、化石のようだといわれつつ、海女は自分の肉体を頼りに、潜水機器といった機械を使うことなく、自分の能力で仕事をしている。しかもその相手は自然なる海である。海女は波浪、海流、潮汐などの海象を熟知している。エモノであるアワビ、サザエ、ウニ、ナマコなど魚介類、さらにその餌ともなり、多くの仔魚の隠れ家ともなる海藻類、それらが織りなす複雑な生態系を、海女は無意識ながら、自分たちも一員であるとして護りつづけている。

海女は磯と呼ばれるこの海に頼って、持続可能な暮らしをすべく努力してきた。海女漁の原則は〈とり過ぎないようにとる〉ことである。アワビは産卵期に達するまでは獲らない。アワビの餌となるアラメは刈取過ぎない。その為に「口開け」の制度を設けて操業の日数を制限する。さらに一日のうちにも1時間を午前午後の2回に制限するといった自己規制を課してきた。最近まで、寒さから身を守ってくれるウエットスーツさえ使用禁止だった地区もある。潜水に力強い味方になる足ヒレを今も禁止している島がある。

長い歴史のなかを生きつづけてきた海女は、現代において新しい役割を負って来ている。